

戒体即身成仏義

仁治三年 廿一歳

安房国清澄山住人 蓮 長 撰

分かつて四門と
為す

- 一には小乗の戒体
- 二には権大乘の戒体
- 三には法華開会の戒体 法華・涅槃の戒体少しく不同有り
- 四には真言宗の戒体なり

第一に小乗の戒体とは四種有り。五戒は俗男俗女戒、八斎戒は四衆通用、二百五十戒は比丘戒、五百戒は比丘尼戒なり。而るに四種俱に五戒を本と為す。婆娑論に云はく「近事律儀は、此の律儀の与に門と為り依と為り加行と為るを以ての故に」云云。近事律儀とは五戒なり。されば比丘の二百五十戒・比丘尼の五百戒も始めは五戒なり。五戒とは諸の小乗經に云はく「一には不殺生戒、二には不偷盜戒、三には不邪淫戒、四には不妄語戒、五には不飲酒戒」以上五戒。此の五戒と申すは、色心二法の中には色法なり。殺・盜・淫の三は身に犯す戒、不妄語戒・不飲酒戒は口に犯す戒、身口は色法なり。此の戒を持つに、作無作・表無表と云ふ事あり。作と表と同じ事なり。無作と無表も同じ事なり。表と申す事は、戒を持たんと思ひて師を請ず。中国は十人、辺国は五人。或は自誓戒もあり。道場を莊嚴し焼香散華して、師は高座にして戒を説けば、今を受くる者左右の十指を合はせて持つと云ふ。是を表色と云ひ作とも申す。此の身口の表作に依りて、必ず無表無作の戒体は発するなり。世親菩薩云云はく

欲の無表は表を離れて生ずること無し」文。此の文は必ず表有りて無表色は発すと見えたり。無表色を優婆塞五戒經の説には「譬へば面有り鏡有れば則ち像現有るが如し。是くの如く作に因りて便ち無作有り」云云。此の文に鏡は第六心王なり、面は表色合掌の手なり、像は発する所の無表色なり。又俱舍論に云はく「無表の大種に依止して転ずる時、影の樹に依り光の珠寶に依るが如し」云云。此の文は、表色は樹の如く珠の如し、無表色は影の如く光の如しと見えたり。此等の文を以て表無表・作無作を知るべし。五戒を受持すれば人の影の身に添ふが如く、身を離れずして有るなり。此の身失すれば未来には其の影の如くなる者は遷るべきなり。色界・無色界の定共戒の無表も同じ事なり。又悪を作るも其の悪の作と表とに依りて、地獄・餓鬼・畜生の無作・無表色を發して惡道に墮つるなり。但し小乗教の意は、此の戒体をば尽形寿一業引一生の戒体と申すなり。「形寿を尽くして一業に一生を引く」と申すは、此の身に戒を持ちて、其の戒力に依りて無表色は発す。此の身と命とを捨て尽くして彼の戒体に遷るなり。一度人間天上に生ずれば、此の戒体を以て二生三生と生まる、事なし。只一生にて其の戒体は失ひぬるなり。譬へば土器を作りて一度使ひて後の用に合はざるが如し。俱舍論に云はく「別解脱の律儀は尽寿と或は昼夜なり」云云。又云はく「一業引一生」云云。此の文に尽寿一生等と云へるは、尽形寿と云ふ事なり。天台大師の御釈に「三蔵尽寿」と釈し給へり。然るに此の戒体をば不可見無対色と申して、凡夫の眼には見えず、但天眼を以て之を見る、定中には心眼を以て之を見ると云へり。然るに私に此の事を勘へたるに、既に優婆塞五戒經に「面有り鏡有れば則ち像現有り」と云ひて、鏡を我が心に譬へ、面を我が表業に譬へ、像をば無表色に譬ふ。既に我が身に五根有り、左右の十指を合すれば五影を生ず。知んぬべし、実に無表色も五根十指の如くなるべき

を。又俱舍論に中有を釈するに「同と淨なる天眼とに見らる。業通ありて疾し。根を具す」云云。此の文分明なり。無表色に五根の形有らばこそ、中有の身には五根を具すとは釈すらめ。提謂經の文を見るに、人間の五根・五臟・五体は五戒より生ずと見えたり。

乃至依報の国土の五方・五行・五味・五星皆五戒より生ずと説けり。止觀弘決に委しく引かれたり。されば戒体は微細の青・黄・赤・白・黒・長・短・方・円の形なり。止觀弘決の六に云はく、提謂經の中の如し「木は東方を主る、東方は肝を主る、肝は眼を主る、眼は春を主る、春は生を主る、生在すれば則ち木安し。故に不殺は以て木を防むと云ふ。金は西方を主る、西方は肺を主る、肺は鼻を主る、鼻は秋を主る、秋は収を主る、収蔵すれば則ち金安んず。故に不盜は以て金を防む。水は北方を主る、北方は腎を主る、腎は耳を主る、耳は冬を主る、淫盛んなれば則ち水増す。故に不淫は以て水を禁ず。土は中央を主る、中央は脾を主る、脾は身を主る、土は四季に王たり。故に提謂經に云はく、不妄語は四時の如しと。身は四根に遍し。妄語又爾なり。諸根に遍して、心に違ひて説くが故に。火は南方を主る、南方は心を主る、心は舌を主る、舌は夏を主る、酒乱るれば火を増す。故に不飲酒を以て火を防む」文。此の文は天台大師提謂經の文を以て釈し給へり。されば我等が見る所の山河・大海・大地・草木・国土は、五根・十指の尽形寿の五戒にてまうけたり。五戒破るれば此の国土次第に衰へ、又重ねて五戒を持たずして、此の身の上に惡業を作れば、五戒の戒体破失して三途に入るべし。是凡夫の戒体なり。声聞・緣覺は、此の表色の身と無表色の戒体を、苦・空・無常・無我と觀じて見惑を断ずれば、永く四惡趣を離る。又重ねて此の觀を思惟して思惑を断じ、三界の生死を出づ。妙樂の釈に云はく「見惑を破るが故に四惡趣を離る。思惑を破るが故に三界の生を離る」文。此の二乗は法華已前の經には、灰身滅智の者、永不成仏と嫌はれしなり。灰身と申すは、十八界の内十界半の色法を断ずるなり。滅智と申すは、七心界半を滅するなり。此の小乗教の習ひは、三界より外に淨土ありと云はず。故に外に生處無し。小乗の菩薩は未だ見思を断ぜず、故に凡夫の如し。仏も見思の惑を断尽して入滅すと習ふが故に、菩薩・仏は凡夫・二乗の所攝なり。此の教の戒に三つあり。欲界の人天に生まる、戒をば律儀戒と云ふなり。色界・無色界へ生まる、戒をば

定共戒と云ふなり。声聞・緣覺の見思断の無漏の智と共に發得する戒をば道共戒と名づく。

天台の釈に云はく「今戒と言ふは律儀戒・定共戒・道共戒有り。此の名源三蔵より出でたり。律は是遮止、儀は是形儀なり、能く形上の諸惡を止む、故に称して戒と為す。定は是静攝なり、入定の時自然に調善にして諸惡を防止するなり。道は是能通なり、眞を發して已後自づから毀犯なし。初果地を耕すに虫四寸を離る、道共の力なり」文。又表業無けれども無表色を發得する事之有り。光法師云はく「是くの如きの十種の別解脱律儀は、必ず定んで表業に依って發するに非ず」云云。此の文は表業無けれども無表色を發する事ありと見えたり。

第二に権大乘經の戒体とは、諸經に多しと云へども、梵網經・瓔珞經を以て本と為す。梵網經は華嚴經の結經、瓔珞經は方等部淨土の三部經等の結經なり。されば法華已前の戒体をば此の二經を以て知るべし。梵網經の題目に云はく「梵網經盧舍那仏説菩薩心地戒品」文。此の題目を以て人天二乗を嫌ひ、仏因仏果

の戒体を説かずと知るべきなり。されば天台の御釈に云はく「所被の人は唯大士の為にして二乗の為にせず」と。又云はく「既に別に部の外に菩薩戒經と稱す」文。又云はく「三教の中に於ては即ち是頓教なり、仏性常住一乗の妙旨を明かす」文。三教と申すは頓教は華嚴教、漸教は阿含・方等・般若、円教は法華・涅槃なり。一乗と申すは未開会の一乗なり。法華の意を以て嫌はん時は、宣説菩薩歴劫修行と下すべきなり。又梵網經に云はく「一切發心の菩薩も亦誦すべし十信之に当たる十發趣十住十長養十行十金剛十向」と。又云はく「十地仏性常住妙果」已上。四十一位又は五十二位。此の經と華嚴經には四十一位又五十二位の論之有り。此の經を權大乘と云ふ事は、十重禁戒・四十八輕戒を七衆同じく受くる故に小乘經には非ず。又疑ふべき処は華嚴梵網の二經には別円二教を説く。別教の方は法華に異なるべし、円教の方は同じかるべし。されば華嚴經には「初發心の時便ち正覺を成ず」と。梵網經には「衆生仏戒を受くれば即ち諸仏の位に入る。位大覺に同じうし已はらば、眞に是諸仏の子なり」文。答へて云はく、法華已前の円の戒体を受けて、其の上を生身得忍を發得するなり。或は法華已前の円の戒体は別教の撰屬なり。法華の戒体は受不受を云はず。開会すれば戒体を發得する事復是くの如し。此の經の十重禁戒とは、第一不殺生戒・第二不偷盜戒・第三不邪淫戒・第四不妄語戒・第五不●酒戒・第六不說四衆過罪戒・第七不自讚毀他戒・第八不慳貪戒・第九不瞋恚戒・第十不謗三宝戒なり。又瓔珞經の戒は、題目に菩薩瓔珞本業經と云へり。此の經も梵網經の如く菩薩戒なり。此の經に五十二位を説く。經に云はく「若しは退き若しは進むとは十住以前の一切の凡夫、若しは一劫二劫乃至十劫、十信を修行して十住に入ることを得」云云。又云はく「十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺」云云。此の經は一々の位に多劫を歴て仏果を成ず。菩薩は十信の位にして仏果の為に十無尽戒を持つ、二乗と成らん為に非ず。故に住前十信の位にして退すれば惡道に墮つ。又人天に生じて生を尽くせども戒体は失はず、無量劫を歴て仏果に至るまで、壞れずして金剛の如くにて有るなり。此の經に云はく「凡聖の戒は尽く心を体となす。是の故に心亦尽くれば戒も亦尽く。菩薩戒は受法のみ有りて而も捨法無く、犯有れども失せず、未來際を尽くす」と。又云はく「心無尽なる故に戒も亦無尽なり」文。又云はく「仏子無尽戒を受け已はれば、其の受くる者四魔を過度し三界の苦を越え、生より生に至るまで此の戒を失はず、常に行人に随ひ乃至成仏す」文。天台大師云はく「三蔵は壽を尽くし、菩薩は菩提に至る。爾の時に即ち廢す」文。此の文は小乘戒は凡夫・聖人・二乗の戒共に尽形壽の戒、菩薩戒は凡夫より仏果に至るまで、その中間に無量無辺劫を歴れども、戒体は失せずと云ふ文なり。されば此の戒は持つて犯すれども、猶二乘・外道に勝れたり。故に經に云はく「有ちて犯する者は、無くして犯さざるに勝れたり、有つは犯するも菩薩と名づけ、無きは犯さざるも外道と名づく」文。此の文の意は、外道は菩薩戒を持たざれば戒を犯さざるも菩薩とは名づけず、菩薩は戒を破犯すれども仏果の種子は破失せざるなり。此の梵網・瓔珞の二經は心を戒体と為す様なれども、實には色処を戒体と為すなり。小乘には身口を本体と為し、大乘には心を本体と為すと申すは一往の事なり、實には身口の表を以て戒体を發す。戒体は色法なり、故に大論に云はく「戒は是色法なり」文。故に天台の梵網經疏に「正しく戒体を出だす。第二に体を出だすとは、初めに戒体とは起こさずんば而已なん。起こさば即ち性なる無作の仮色なり」文。「起こさずんば而已なん」とは、表なければ戒体發せずと云ふなり。「起こさば即ち性なる無作の仮色なり」とは、戒体は色法と云ふ文なり。近來唐土の

人師、梵網・法華の戒体の不同を弁へず、雜乱して天台の戒体を談じ失へり。瓔珞經の十無尽戒とは、第一不殺生戒・第二不偷盜戒・第三不邪淫戒・第四不妄語戒・第五不●酒戒・第六不說四衆過罪戒・第七不慳貪戒・第八不瞋恚戒・第九不自讚毀他戒・第十不謗三宝戒なり。梵網・瓔珞の十重禁戒・十無尽戒も初めに五戒を連ねたり。大小乗の戒は五戒を本と為す。故に涅槃經には具足根本業清淨戒とは是五戒の名なり。一切の戒を持つとも、五戒無ければ諸戒具足すること無し。五戒を持ってば諸戒を持たざれども、諸戒を持つに為りぬ、諸戒を持つとも五戒を持たざれば諸戒も持たれず、故に五戒を具足根本業清淨戒と云ふ。されば天台の釈に云はく「五戒は既に是菩薩戒の根本なり」と。諸戒の模様を知らんと思はゞ、能く能く之を習ふべし。

第三に法華開会の戒体とは、仏因仏果の戒体なり。唐土の天台宗の末学、戒体を論ずるに、或は理心を戒体と云ひ、或は色法を戒体と論ずれども、未だ梵網・法華の戒体の差別に委しからず。法華經一部八卷二十八品・六万九千三百八十四字、一々の文字、開会の法門実相常住の無作の妙色に非ずといふこと莫(な)し。此の法華經は三乘・五乘・七方便・九法界の衆生を皆毘盧遮那の仏因と開会す。三乗は声聞・緣覺・菩薩、五乘は三乘に人天を加へたり。七方便は藏通の二乘四人、三藏教の菩薩・通教の菩薩・別教の菩薩三人、已上七人。九法界は始め地獄より終はり菩薩界に至るまで、此等の衆生の身を押しへて仏因と開会するなり。其の故は、此等の衆生の身は皆戒体なり。但し疑はしき事は、地獄・餓鬼・畜生・修羅の四道は戒を破りたる身なり、全く戒体無し。人・天・声聞・緣覺の身は尽形壽の戒に酬いたり。既に一業引一生の戒体、因は是善惡、果はは無記の身なり。其の因既に去りぬ。何なる善根か有りて法華の戒体と成るべきや。菩薩は又無量劫を歴て成仏すべしと誓願して發得せし戒体なり。「須臾聞之即得究竟」の戒体と成るべからず。此等の大なる疑ひ有るなり。然るを法華經の意を以て之を知れば、十界共に五戒なり。其の故は、五戒破れたるを四惡趣と云ふ、五戒失せたるに非ず。譬へば家を造つてこち置きぬれば材木と云ふ物なり、数の失せたるに非ず、然れども人の住むべき様無し、還つて家と成れば又人住むべし。されば四惡趣も五戒の形は失せず。魚鳥も頭有り、四支有るなり。魚のひれ四つ有り、即ち四支なり。鳥は羽と足とあり、是も四支なり。牛馬も四足あり、二つの前の足は即ち手なり。破戒の故に四足と成りてすぐにたゞざるなり。足の多くある者も、四足の多く成りたるにて有るなり。蠕蛇の足なく腹ばひ行くも、四足にて歩むべきことはりなれども、破戒の故に足無くして歩むにて有るなり。畜生道此くの如し。餓鬼道は多くは人に似たり。地獄は本の人身なり。苦を重く受けん為に本身を失はずして化生するなり。大覺世尊も五戒を持ち給へる故に淨飯王宮に生まれ給へり。諸の法身の大士、善財童子・文殊師利・舍利弗・目連も皆天竺の婆羅門の家に生まれて仏の化儀を助けんとて、皆人の形にて御座しましき。梵天・帝釈の天衆たるも、竜神・修羅の惡道の身も、法華經の座にしては皆人身たりき。此等は十界に亘りて五戒が有りければこそ、人身にては有らぬ。諸經の座にては四惡趣の衆生、仏の御前にて人身たりし事は不審なりし事なり。舍利弗を始めとして千二百の阿羅漢・梵王・帝釈・阿闍世王等の諸王、韋提希等の諸の女人、皆「衆生をして仏知見を開かしめ清淨なることを得せしめんと欲す」と開会せし事は、五戒を以て得たる六根・六境・六識を改めずして、押さへて仏因と開会するなり。竜女が即身成仏は畜生蛇道の身を改めずして、三十二相の即身成仏なり。畜生の破戒

にて表色なき身も、三十二相の無表色の戒体を發得するは、三惡道の身即ち五戒たる故なり。されば妙樂大師の釈には五戒を十界に亘し給へり「別して論ずれば、然りと雖も通の意知るべし。余色・余塵・余界も亦爾り。是の故に須く仁讓等の五を明かすべし」云云。余色とは九界の身、余塵とは九界の依報の国土、余界とは九界なり。此の文は人間界を本として、五常・五戒を余界へ亘すなり。但し持たざる五戒は、如何に三惡道には有りけるぞと云ふに、三惡道の衆生も人間に生まれたりし時、五戒を持ちて其の五戒の報を得ずして三途に墮ちたる衆生もあり。此の善根をば未酬の善根と云ふ。又既に人間に生まれたる事もあり、是をば已酬の善根と云ふ。又無始の色心有り。此等の善根を押さへて正・了・縁の三仏性と開會する時、我が身に善根有りと思はざるに、此の身を押さへて「欲令衆生開仏知見使得清淨故」と説かる、は、人天の果報に住する五戒十善も、權乘に趣ける二乗も菩薩も「皆已に仏道を成ず、汝等行ぜし所は是菩薩道」と説かれたるなり。されば天台の御釈に云はく「昔は方便未だ開せざれば果報に住すと謂へり。今方便の行、即ち縁因仏性と開するに、能く菩提に趣かしむ」云云。妙樂大師は「權乘の道に趣向せし者も、一実の觀・一大の弘願を以て之を体し之を導く」云云。是くの如く意得る時、九界の衆生の身を仏因と習へば、五戒即仏因なり。法華已前の經には此くの如き説なき故に、凡夫・聖人の得道は名のみ有りて実無きなり。されば此の經に云はく「但虚妄を離る、を名づけて解脱と為す。その実は未だ一切の解脱を得ず」文。愚かなる学者は、法華已前には二乗計り色心を滅する故に得道を成ぜず、菩薩・凡夫は得道を成ずべしと思へり。爾らざる事なり、十界互具する故に妙法なり、さるにては十界に亘つて二乗・菩薩・凡夫を具足せり。故に二乗に成仏せずと云はゞ、凡夫・菩薩も成仏せずと云ふ事なり。法華の意は、一界の成仏は十界の成仏なり。法華已前には仏も実仏に非ず、九界を隔てし仏なる故に。何に況んや九界をや。然るに法華の意は、凡夫も實には仏なり、十界互具の凡夫なる故に。何に況んや仏界をや。されば天台大師は一代聖教を十五遍御覽有りき。陳・隋二代の国師として造り給ひし文は、天竺・唐土・日本に、玄義・文句・止觀の三十卷はもてなされたり。

御師は六根清淨の人南岳大師なり。此の人の御釈の意一偏に此にあり。此の人を人師と申してさぐるならば、經文分明なり。無量義經に云はく「四十余年未だ眞実を顯はさず」云云。法華已前は虚妄方便の説なり。法華已前にして一人も成仏し、淨土にも往生してあらば、眞実の説にてこそあらめ。又云はく「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぎて、終に無上菩提を成ずることを得ず」文。法華經には「正直に方便を捨て、但無上道を説く」云云。法華已前の經は不正直の經、方便の經。法華經は正直の經、眞実の經なり。法華已前に衆生の得道があらばこそ、行じ易き觀經に付きて往生し、大事なる法華經は行じ難ければ行ぜじと云はめ。但釈迦如来の御教の様に意得べし、觀經等は此の法華經へ教へ入れん方便の經なり。淨土に往生して成仏を知るべしと説くは、權教の配立、觀經の權説なり。眞実には此の土にて我が身を仏因と知って往生すべきなり。此の道理を知らずして、淨土宗の日本の学者、我が色心より外の仏国土を求めさする事は、小乘經にもはづれ大乘にも似ず。師は魔師、弟子は魔民、一切衆生の其の教を信ずるは三途の主なり。法華經は理深解微にして我が機に非ず、毀らばこそ罪にてはあらめと云ふ。是は毀るよりも法華經を失ふにて、一人も成仏すまじき様に有るなり。設ひ毀るとも、人に此の經を教へ知らせて、此

の経をもてなきば、如何かは苦しかるべき。毀らずして此の経を行ずる事を止めんこそ、弥怖ろしき事にては候へ。此を経文に説かれたり。「若し人信ぜずして此の経を毀謗せば、則ち一切世間の仏種を断ぜん。或は復響感して疑惑を懐かん、其の人命終して阿鼻獄に入らん。地獄より出でて当に畜生に墮すべし、若しは狗・野干、或は驢の中に生まれ身常に重きを負ふ。此に於て死し已つて更に蟒身を受けん。常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く、余の悪道に在ること己が舍宅の如くならん」文。此の文を各御覽有るべし。「若し人信ぜず」と説くは末代の機に協はずと云ふ者の事なり。「此経を毀謗せば」の毀はやぶると云ふ事なり。法華經の一日経を皆停止して称名の行を成し、法華經の如法経を浄土の三部経に引き違へたる、是を毀と云ふなり。権経を以て実経を失ふは、子が親の頸を切りたるが如し。

又觀經の意にも違ひ、法華經の意にも違ふ。謗と云ふは但口を以て誹り、心を以て謗るのみ謗には非ず。法華經流布の国に生まれて、信ぜず行ぜざるも即ち謗なり。「則ち一切世間の仏種を断ず」と説くは、法華經は末代の機に協はずと云ひて、一切衆生の成仏すべき道を閉づるなり。「或は復響感」と云へるは、法華經を行ずるを見て、唇をすくめて、なにともなき事をする者かな、祖父が大なる足の履、小さき孫の足に協はざるが如くなんど云ふ者なり。「而も疑惑を懐く」とは、末代に法華經なんどを行ずるは実とは覺えず、時に協はざる者をなんど云ふ人なり。此の比の在家の人毎に、未だ聞かざる先に天台・真言は我が機に協はずと云へるは、只天魔の人にそひて生まれて思はするなり。妙樂大師の釈に云はく「故に知んぬ、心宝所に趣くこと無くんば、化城の路一步も成ぜず」文。法華經の宝所を知らざる者は、同居の浄土・方便土の浄土へも至るまじきなり。又云はく「縦ひ宿善有ること恒河沙の如くなるも、終に自ら菩提を成ずるの理なし」文。称名・誦經・造像・起塔・五戒・十善・色無色の禅定、無量無辺の善根有りとも、法華開会の菩提心を起こさざらん者は、六道四生をば全く出でまじきなり。

法華經の悟りと申すは易行の中の易行なり。只五戒の身を押へて仏因と云ふ事なり。五戒の我が体は即身成仏とも云はるゝなり。小乗の意、権大乘のおきては、表にて無表を發す。此の法華經は三世の戒体なり。已酬・未酬俱に仏因と説いて、三惡道の衆生も戒体を發得ず。竜女が三十二相の戒体を以て知んぬべし。況んや人・天・二乘・菩薩をや。法華經一部に列なれる九界の衆生は、皆即身成仏にてこれ有りしなり。止觀に云はく「中道の戒は戒として備はざることなし、是を具足と名づく。中道戒を持つなり」云云。中道の戒とは法華の戒体なり。無戒不備とは、律儀・定・道の戒なり。此の五戒を十界具足の五戒と知る時、我が身に十界を具足す。我が身に十界を具すと意得る時「欲令衆生仏之知見」と説いて、自身に一分の行無くして即身成仏するなり。尽形壽の五戒の身を改めずして仏身となる時は、依報の国土も又押へて寂光土なり。妙樂の釈の云はく「豈伽耶を離れて別に常寂を求めんや、寂光の外に別に娑婆あるに非ず」文。法華已前の経に説ける十方の浄穢土は、只仮説の事に成りぬ。又妙樂大師の釈に云はく「国土浄穢の差品を見ず」云云。又云はく「衆生自ら仏の依正の中に於て殊見を生じて苦樂昇沈す。浄穢宛然として成壞斯に在り」文。法華の覺りを得る時、我等が色心生滅の身即不生不滅なり。国土も爾の如し。此の国土の牛馬六畜も皆仏なり、草木日月も皆聖衆なり。経に云はく「是の法は法位に住して世間の相常住なり」文。此の経を意得る者は持戒・破戒・無戒、

皆開会の戒体を發得するなり。經に云はく「是を戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく」云云。法華經の悟りと申すは、此の国土と我等が身と釈迦如来の御舍利と一つと知るなり。經に云はく「三千大千世界を觀るに乃至芥子の如き許りも、これ菩薩にして身命を捨てたまふ處に非ざること有ること無し」文。此の三千大千世界は、皆釈迦如来の菩薩にておはしまし候ひける時の御舍利なり。我等も此の世界の五味をなめて設けたる身なれば、又我等も釈迦菩薩の舍利なり。故に經に云はく「今此の三界は皆是我が有なり。其の中の衆生は悉く是吾が子なり」等云云。法華經を知ると申すは、此の文を知るべきなり。「我が有」と申す有は、其れ真言宗に非ざれば知り難し。但し天台は眞性軌と釈し給へり。舍利と申すは天竺の語、此の土には身と云ふ。我等衆生も則ち釈迦如来の御舍利なり。されば多宝の塔と申すは我等が身、二仏と申すは自身の法身なり。眞實には人天の善根を仏因と申すは、人天の身が釈迦如来の舍利なるが故なり。

法華經を是の体に意得る則んば真言の初門なり。此の国土・我等が身を釈迦菩薩成仏の時、其の菩薩の身を替へずして成仏し給へば、此の国土・我等が身を捨てずして、寂光淨土・毘盧遮那仏にて有るなり。十界具足の釈迦如来の御舍利と知るべし。此をこそ大日經の入漫荼羅具緣品には慥かに説かれたるなり。真言の戒体は人之を見て師に依らずして相承を失ふべし。故に別に記して一具に載せず。但標章に載する事は人をして顕教より密教の勝る、ことを知らしめんが為なり。